

動物物語集 二

あすか  
こうじ

1. [しんた君の大冒険](#)

1. [聖夜の奇跡](#)

1. [青くない鳥](#)

1. [あしがき](#)





[しんた君の大冒険](#)

[聖夜の奇跡](#)

[青くない鳥](#)

[あとがき](#)

## しんた君の大冒険

ある夜のこと、小学校二年生のしんた君は気持ちよく眠っていたのですが、ふと目が覚めました。おしっこをしたくて、おふとんから出たのですが、へやの中の空気は冷たく、しんた君はぶるっと身ぶるいしました。寒いし、トイレに行くのはいやだなあ、と思いましたが、行かないことにはおしっこするわけにはいきません。仕方なく、ろうかに出ると、暗くて、昼間よりもずっと長く感じました。となりにならんで寝ていたお姉ちゃんを起こして、いっしょに一階のトイレまで行ってほしかったのですが、もしそんなことをしたら、男のくせに、とか言われて、また思うさま、バカにされてしまうに決まっています。

しんた君は少しまよってから、一人で行きました。ちゃんとおしっこをして、少しホッとしてトイレを出ると、かすかに何かが擦れるような音がしました。暗い中、恐る恐る目をこらして見てみると、飼い猫のジローが階段を上がっていく後ろ姿が見えました。ジローというからには牡猫です。白地に黒のいわゆるぶち猫なのですが、左目の周りが黒くなっているのが、アイ・パッチをつけた海賊みたいでかっこいいのです。しんた君は、そのことがちょっと自慢だったりします。

なんだ、ジローか、としんた君はホッとしたのですが、当のジローは何やら、黒い布を口でくわえて、引きずっているようです。しかも、その格好がいかにもこそこそとしているようで、しんた君もなんとなく声をかけそびれ、ジローが階段を上りきって見えなくなるまで、息を殺して見送ったのです。そして、ジローの姿が完全に見えなくなるのを待って、少し経ってから、階段を上がりました。

次の日、しんた君は、友だちのひでし君といっしょに学校から帰ってきたのですが、その途中で、ひでし君が、夜中、外でジローを見たと言ったのです。昨日はお兄ちゃんの誕生日だったので、家族で外食したのですが、お父さんの残業が終わってからみんな一緒に行ったので、帰りがかなり遅くなったのだそうです。そういえば、ひでし君は今日、学校で何度も生あくびをしていました。

「そんなわけないよ。うちは外に出さないようにしてるもん」

しんた君はびっくりして、言い返しました。

「いや、あれは絶対、絶対ジローだったって」とひでし君も言いました。

「ジローって、変わった模様だから、絶対に他の猫とまちがったりしないって」

言われてみれば、確かにそのとおりです。ジローみたいな色の猫は、しんた君は他に見たことがありません。体の色は上半身というか、前半分が黒くて、おしりのあたりが白く、後ろ脚の先がどちらも黒い、いわゆるソックスタイプになっています。なので、黒い上着を着ているみたいに見えるのです。

「んー、まあ、そりゃそうだけど...。でも、外に出て行ったはずはないけどなあ」

小さな石ころを、道路の隅に軽く蹴りながら、しんた君は言いました。そうです。ちゃんと扉にも窓にも鍵がかかっているのですから、ジローが外に出られるはずがないのです。

しんた君が不思議がっていると、ひでし君がさらに言いました。

「ジローだけじゃないよ、他の猫もいっぱいいたんだ」

そして、大勢の猫たちが同じ方に向いて、鳴き声も出さずに、じっと何かを見ているようだった、それが異様な雰囲気だった、というのです。しんた君はあきれました。あきれましたが、ふと思い出したことがあって、ひでし君に聞いてみました。

「ねえ、そのとき、ジローのやつ、何か布みたいな、黒いのを持ってなかった？」

「さあ、暗いし、そこまではよくわからなかったよ。僕も、お父さんの車に乗ってて、ちらっと見ただけだったし。」

ふうん、と言ったきり、しんた君は考え込んでしまいました。ひょっとして、秘密の抜け道でもあるのかしら？猫だけが通れるような、小さな抜け穴なら、家族の誰もが気づかなくても不思議はありませんよね？

そう考えつくと、しんた君はもうがまんできなくなりました。早く帰って、抜け穴がないか、調べてみたい！そう、やっぱり男の子たるもの、一度くらいは名探偵にあこがれて、家の中を捜索してみなくては！いいぞ、がんばれ、しんた君。

家に帰ってくると、リビングでジローを見かけました。香箱を組んで、ガラス戸から外を見えています。しんた君がただいま、と声をかけると、右耳だけしんた君の方に向けて、さっと一回、しっぽをはたくように動かしました。

いつもと変わらない、そんな仕草もなんだか今日は、意味ありげに感じられます。しんた君は、自分の部屋にランドセルを置くと、すぐにリビングに戻って、ジローを見張ることにしました。

テレビを見ているふりをして、時々、横目でジローを見していますが、これと言って、何をするわけでもありません。2回、大きなあくびをしたくらいのものです。

しんた君はちょっと飽きてきました。それに、考えてみれば、ジローがあやしい行動をとったのは、夜のことです。昼間、こうして見張っていても、意味がないかもしれません。

そろそろ見張るのをいったんやめようかな、としんた君が思ったときでした。

ジローの耳がぴくっ、と鋭く動きました。ハッとして、しんた君が息を殺して見ていると、庭によその猫が来ています。どこにでもよくいるようなトラ猫です。その猫が、ジローの方に向かって、何か言っているように、口を動かしています。ジローは声を出しません、少し耳を動かして、しっぽをサッと振りました。その動作が、今は人が見てるから後で来い、という意味のように、しんた君には思えました。

じっと見ていると、ジローはふいにその場を離れ、とことこ歩いて、階段の方に向かいました。しんた君があわてて後を追いかけると、ジローはそのまま2階に上がっていきました。当然、しんた君も、そっと後をつけます。

でも、しんた君が2階にあがってみると、ジローはどこにいるのか、見当たりません。不思議に思って、あちこち探してみましたが、結局、どこに行ったのかわからないまま、しんた君が途方に暮れていると、下の階から、みゃ〜う、と聞き覚えのある声がしました。

「あれえ、ジロー、いつの間に降りたの？」

しんた君はなんだかまぬけな声を出してしまいました。下に降りてみると、ジローは左の後ろ脚で耳の後ろあたりをかいていました。そして、不思議そうな顔をしているしんた君の方をちらり、と見て...にやりと笑ったみたいでした。

なんだかうまくはぐらかされてしまったようで、しんた君はちょっとおもしろくありません。それから、何日か遅くまで起きて、気をつけていましたが、ジローが出かける様子はありませんでした。その内、しんた君はあきてしまって、それに、眠いののががまんできなくなって、ジローを見張るのはやめてしまいました。そうして、何事もなく、数週間過ぎたのですが...

夜中におしっこがしたくて目を覚ましたしんた君は、一人でお手洗いに行きました。そのとき、意外なものを見たのです。

お手洗いの隣に洗面所があつて、そこに洗濯機が置いてあるのですが、その上にジローが乗って、上の小窓に手（正確に言えば前足なのでしょうけれど、あまりに器用に動かす格好を見ると、手としか言いようがありません）をのぼしているのです。驚きましたが、驚きすぎて声が出なかったのが逆に幸いしました。しんた君は見つからないように、ちょっと後ろに下がって、息を殺してその様子をじっと見守りました。口には、何か黒っぽいものをくわえています。

そして、人間がするみたいに上手に、ちょいちょいと小窓のクレセント錠を回して、窓を開けてしまいました。そして、すいーっと窓を開けると、そこから外へびよん、と飛び出したのです。

さらに驚いたことに、窓の向こう側にぼんやりと、猫の手らしきものが見え、開けたときみたいにすいーっと、今度は窓を閉めたのでした。

しんた君はあわてて（でもできるだけ静かに）玄関から外に出ました。ジローと、何匹かの猫と一緒に、とことこと小走りにどこかに急いでいます。方向からすると、しんた君がよく友達と遊んでいる公園に行くようです。

しんた君は今まで、ジローは家から出たことがないと思っていたのですが、迷いなく進んでいく様子を見てみると、たぶん、何度も外に出たことがあるようです。それに、他の猫とも顔なじみのような雰囲気です。こんなジローは、今まで見たことがありません。しんた君はなんだか怖くなってきました。

でも、猫たちが何をしようとしているのか、気になって仕方ありません。しんた君は、見つからないように気をつけながら、こっそり後をつけていきます。後をつけながら、ふと見上げると、まん丸いお月様が、猫たちも、しんた君も、寝静まった街も、静かに見下ろしています。

やっぱり、猫たちは、しんた君がよく遊んでいる児童公園に集まってきました。しんた君は、慎重に角の家の陰に身を隠して、猫たちの様子を見ていました。公園は周りよりも少し高くなっていますが、壁や生け垣のたぐいがないので、中の様子はよく分かります。あちらからもこちらからも、猫たちは集まってきました。一、二、三、四...動き回るので、途中からわからなくなりましたが、二十匹はいるでしょう。集まった猫たちは、すべり台の上に上がっていきます。それぞれ、適当に場所を決めて落ち着き、月を見上げているようです。

あ！気がつくと、すべり台の一番上にいるのは、ジローではないでしょうか。そうです、間違

いありません。ジローがいます。

そのことに気がつくのと、しんた君はじっとしていられなくなっていて、思わず、公園の方に駆けだしてしまいました。幸い、猫たちは皆、夜空の、同じ方向を見上げていて、しんた君には気がついていない様子です。しんた君は、公園の端の斜面にピッタリと身を寄せました。これで死角になるはずなのですが...実際のところは、すべり台の上からなら、丸見えになってしまいます。でも、しんた君は気がつきません。

やがて、ジローは、もぞもぞ動いて、くわえていた黒いものを頭にちょこん、と載せました。それは、海賊の頭<sup>かしら</sup>がかぶっているような形の帽子でした。しんた君は驚いて、あっ、と小さな声をあげてしまいました。

何匹かの猫の耳がピクツ、とこちらを向きました。しんた君はあわてて、さらに力を入れて斜面に体を押しつけましたが、猫たちが耳だけでなく、顔も振り向いたのです。人間だ！人間だ！しんた君を見つけた猫たちが、途端に騒ぎ出しました。

怖い！しんた君は逃げ出そうとしましたが、膝が震えて動けません。そのとき、ジローが振り向きました。助けて、ジロー！しんた君は叫んだつもりでしたが、声は出ませんでした。

ジローが何か言いました。とはいっても、しんた君の耳には、ニャーとしか聞こえませんでしたので、何が起きるのか、しんた君は不安でたまりません。数匹の猫がしんた君の方に歩いてきました。そして、しんた君に向かって、ついて来い、とでもというような態度をとったのです。見上げると、ジローもこちらを見ています。目が合った瞬間、軽くうなずいたように見えました。

仕方なく、しんた君は猫たちにうながされるまま、すべり台の上に上がって行きました。そこに上がると、ジローがこちらを振り向きました。するとどうでしょう、ジローの頭の上にちょこんと乗っかって、さっきまで黒いボロ布のように見えていたものは、海賊風の立派な帽子でした。その下に、海賊風のアイパッチみたいな模様の、ジローの顔があって、真剣な眼でこちらを見えています。その様は、本物の海賊（といったって、しんた君は、テレビか映画でしか、海賊を見たことはありませんけどね）みたいです。

でも、本物の海賊ならば、ドクロの下に、骨をx印に重ねた絵が描いてあるものですが、ジローの帽子は魚の骨が二つ、x印に重ねたデザインなのです。それがいかにも嘘くさい感じがするのです。

ジローはその帽子をとると、しんた君の頭に被せるようにしてきました。何をしたいのかよく分かりませんが、ここまできたら、とことんつきあうしかありません。ええい、とばかりにしんた君はそれを手にとって、被ってみました。

すると突然、それまでにゃーとかみーとかしか聞こえなかった、猫たちの声ははっきりと人間の言葉に聞こえるようになったのです。

「何よ、アイツ？人間の子どもなんか、とっとと追い返せばいいのに」

そうぼやいているのは、左前のあたりにいる白い猫です。早くしろー、時間がないぞー、という声が後ろから聞こえてきたので、ちら、と振り向いてみると、けしかけているのは、近所でたまに見かけるトラ猫でした。



「静まれい！」ジローがひととき大きな声をあげました。すると、てんでに喋っていた猫たちが途端に、しん、と静かになりました。ジローは一通り、ジロリと睨みを効かせると、さらに大きな声で言いました。

「いいか、野郎ども。今宵は満月、いぎ、月影の海へと漕ぎ出でん！今夜こそ、月ねずみの一群を討ち果たし、天下に我ら猫族の威光を示すのだ！いぎ、舵を取れ！よーそろー！」

すると、その言葉に合わせるように、月の光は蒼白い波に変わり、なめらかにうねり始めました。気がつくと、言葉どおりに、ジローの傍らにいた茶トラの猫が後ろ脚二本でしっかと立ち、前脚で舵輪を操っています。すべり台はいつの間にか、真ん中にマストが立った、船の司令室になっていました。

そのマストに光の帆を張って、船は蒼い月明かりの波の上を滑るように進み始めました。

「面舵いっばーい！」

ジローが叫ぶと、船は大きく右に傾<sup>かし</sup>いで、進路を右に変えます。程よく向きが変わったのでしよう、ジローがよーそろー！と叫ぶと、その向きのまま、船は力強く進みます。何匹かの猫たちが、巧みに帆をあやつって、ジロー（見ているかぎり、彼がこの船の船長のようなのです）の指示どおりに、船を動かしているのです。

船はまっすぐに、満月に向かって行きました。だけど、月は宇宙の彼方にあるはずです。この船は宇宙に飛び出して、月まで行ってしまうのでしょうか？しかし、何もない暗黒の空間に、ぽっかりと白く浮かび上がる月は、光の溢れ出す大きな穴でした。光に包まれて、船は巨大な空白の中へと進んでいきます。しんた君は思わず目をつぶりました。

やがて、眩い光が静かに引いていくと、蒼白い海の真ん中に、黒々と大きな島が浮かんでいるのが視<sup>み</sup>えました。船はその島に向かって進みます。猫たちの間に緊張感が高まってきました。

勇壮な三毛猫は、シャッ、と爪を出して、鋭さを確かめるように、光に透かして見えています。別の黒猫は、背中の毛をチリチリと逆立たせて、今にもフウーツ、とうなり声をあげそうな勢いです。

そういえば、ジローは月ねずみを倒すとか何とか、勇ましいことを言っていました。あの島に、月ねずみとやらがいるのでしょうか。

いよいよ船が島に接舷しようとしたとき、ジローが素早くしんた君のところにやって来て、坊ちゃん、こいつで戦ってくん、と囁いたかと思うと、しんた君の手に何か押しつけました。驚いて見てみると、それは不思議な光で包まれた一振りの宝剣でした。なぜ、ジローがこんなものを？と思ったときには、船が岸壁に接触し、猫たちがなだれを打って、島に上陸するところでした。

ウンニャア！

号令ともつかない唸り声ですが、これだけの猫が集まっているのですから、凄まじい咆吼です。同時に、猫たちが島の上に走り出し、ねずみどもに襲いかかっていきました。逃げ回るのもい

ますが、ねずみたちも必死ですから、牙を剥きだし、爪を尖らせて反撃します。

しんた君は最初、呆然としていましたが、襲いかかってきたねずみを、ジローが鋭い爪で倒したときに、ふと我に返りました。ここは戦場なのです。争っているのが小さな生き物だとはいえ、死にものぐるいで戦っているのです。あわてて、しんた君も光の剣を振りかざしました。

ウオオーツ、と叫べば、あとは体が勝手に動きました。宝剣が月ねずみを切り裂くと、ねずみたちは光の粒に変わって、四散しました。猫たちも、爪や牙で、ねずみたちを次々とやっつけていきます。

やがて、あたりが静かになったので、どうしたのかと見回してみると、ねずみの王らしく見える、大きなねずみがジローと対峙していました。

大ねずみが牙を剥きだして、言いました。

「お前なんぞ、この牙の前にはぬいぐるみに等しいぞ！」

すると、ジローは一本だけ、爪を目の前に出して、ニヤリと<sup>わら</sup>囁きました。

「爪十本、全部はいらねえ。こいつだけで、三枚おろしにしてやるぜ」

しんた君は大変だ、と思いました。ジローは勝つと思いますが、ねずみも他のと違って、特別に大きいねずみです。もし、ジローが負けたら、と思うと、矢も盾もたまらず、飛び出していました。

「やーっ！ここは僕が相手だ！」

しかし、それより一瞬だけ早く、ジローが爪をふるっていました。それを、ねずみの王が、巨体に似合わぬ素早い動きでかわしましたが、そのために、しんた君が光の剣を振り下ろしたところに、ちょうど大ねずみの頭が来たのです。

すごい音がして、ねずみ王はもんどり打って倒れました。しかしまた、しんた君の宝剣も少しひびが入ってしまったようです。光も弱くなっていました。

猫たちが、いっせいに、にゃー！と勝ち鬨を上げました。しかし、そのとき、あたりを覆っていた光がゆらぎ、島が揺れ始めました。

「む、月が欠け始めたか！いかん！満月の魔法が破れる！」

叫ぶが早いか、ジローは大声で退却を命じました。猫たちがいっせいに走り出し、我先にと船に戻りました。しんた君も、ジローと並んで走りました。

大急ぎで船を出し、満月の入り口から、再び外に出てきたとき、一瞬、意識がなくなるような感覚があり...、そのあと、どうなったのか、さっぱりは分からないのですが...、次にしんた君を驚かせたのは、いつもの目覚まし時計の音でした。

あれえ、変な夢見たなあ、と思って、まだ眠い目をこすりながら、しんた君が階段を降りてくると、玄関先でお母さんがきゃっ、と小さく悲鳴をあげました。続いて、ジローに怒っているようです。なんだろう、と思って見てみると、三和土にねずみの死体が転がっています。お母さんは、ジローに怒っていますが、ジローはこたえている感じではありません。ちらっとしんた君の方を見て、にや、と笑ったようにも見えました。

昨日のあれは、本当にあったことなのかしらん？しんた君はなんだか不思議な気分ひたりな

がら朝食を終えると、ランドセルを手に取りました。あれ？いつも学校に持っていくプラスチックの三十センチぎしに、少しだけ、ひびが入っていますよ。

お母さんに、行ってきますと言うと、お母さんが行ってらっしゃい、と言う間に、ジローは小さなあくびを一つして、向こうに歩いていきました。お母さんも、奥に行きました。

学校に着いてから、しんた君は昨日の夜のできごとを、友達に話したくて仕方ありませんでした。でも、話しても、誰も信じないでしょう。だって、しんた君自身、あれが本当にあったことなのかどうか、はっきり自信が持てないのですから。

それから、何度も満月の夜が来るたびに、こっそりジローを見張っているしんた君ですが、あれ以来、ジローが外に出て行くことはありません。ひよっとしたら、しんた君が月ねずみ（って、何でしょうね？）の王様を倒してしまったので、もう戦いにいく理由がないのかもしれない。

でもね、しんた君は丸い月を見上げながら、考えるのです。あれが現実であったにせよ、夢だったにせよ、とっても不思議で楽しかった！って。だけど...、一度こっきりなんだ、何度もしてはいけない体験だったんだ、って。だって、もし、月の向こう側に行ってしまうと、帰ってこられなくなったら大変ですものね！

## 聖夜の奇跡

いやあ、唐突ですが、皆さんは占いとか予言の類(たぐい)を信じますか？いやね、あたしや常々、不審に思っていることがあるんですよ。信じる者は救われる、なんて言いますがね、信じなければ救われないんでしょかね。

例えばですよ、ここに「あなたは数日中に交通事故で死ぬ」という予言を受けた人物がいるとします。彼は(或いは彼女は、でも構わないんですが)その予言を気にして、自動車で通勤していたのをやめ、電車での通勤することにした。ですが、暴走していた自動車が彼の乗った車両に横から突っ込んできたために死亡、なんて事故がもし起きたとしたら、皆さん、どうお考えになりますか？

彼(或いは彼女)がもし、予言を信じないで、今まで通り自動車で通勤していたら、その人物は死なずにすんだかもわかりません。いや、もちろん、自動車で乗ってれば乗っていたで、別の事故に巻き込まれて同じ結果になっていたかもしれないのです。

でも、あたしにはどうも、そうは思えないんです。信じることによって、予言が実現したのではないか、そんなバカな考えから逃れられないんですな。皆さんはそうはお考えになりませんか？ん？それは信じるとか信じないとかいうこととは関係なく、単に予言が当たったってことだろうって？なるほど、そうかも知れませんが、じゃあ、次にお話しする場合はどうでしょうか？え？それ以前にそういうお前は何者なんだって？いや、これは失礼しました。申し遅れましたが、あたしやただの通りすがりのあやしい者です。それ以上でも、それ以下でもありません。え？いやいや、名乗るほどの者ではありませんって。

で、さっき言いかけていた話なんですがね、次に話すような場合はどうでしょうか？なあに、それはある二十代後半の男性の身に起きたできごとなんです。妻も子もある男性です。

いや、ある日のこと、と申し上げておきましょう、彼は帰宅途中で学生時代の友人とバツタリ出くわしたんです。久しぶりに会った二人は意気投合して、一杯やりに出かけることにした。で、一次会と二次会の間にたまたま通りかかったゲームセンターに入った、と。学生時代に戻った気分であそびたんですが、最新占いマシンとやらを見つけて、まあ占ってみたわけなんです。問題の彼は「黒猫が幸運を呼ぶ」というメッセージを受け取った。友人の方は「金運が下降しています」という結果が出た。まあ、その後、二人は二次会になだれ込んで、しこたま飲んで帰ったわけなんです。当然、男は妻からさんざん小言を言われたけど、それはそれですんだんです。

でも、次の朝(休日だったんですがね)、昨日一緒に飲みに行った友人から電話がかかってくる。彼は財布をなくしたって言うんですな。それで、心当たりがないか、電話で尋ねてきたというわけです。その電話の中でその友人がしきりに、金運が悪いって言う占いが当たったと嘆くもんですから、自分の占いの結果が気になってきた。げんきなもんですな、その男、飲んだせいもあってか、自分の占いの結果を覚えてなかったんです。

で、友人に尋ねてみると、その友人もちやんと覚えていなくて、「確か、黒猫に気をつけろ」とかなんとか言われたと答えたんです。で、我らが主人公君も、そう言えば黒猫という言葉には聞き覚えがあるし、そう言われたという気分になってきたわけです。

彼はその日の午後、パチンコに行くと嘘をついて一人で出かけます。でも、それは実は口実なんですな、まあ普段なら他の理由をでっちあげてパチンコ屋に行くことはあってもその逆なんてあり得ないんですが、この日は彼の子供にクリスマスプレゼントを買ってやるんで、一人で出かける必要があったわけです。

子供さんのある家庭なら一度くらいはやった覚えがあるんじゃないですか？こっそりプレゼントを買っておいて、寝ている間に枕元に置いてやる。子供はサンタクロースがやってきて、プレゼントを置いていってくれたのだと思って喜ぶというわけです。

ま、そんなわけが出かけた彼ですが、ちょうどコンビニの前を通ろうとしたときに、そこに黒猫がいるのに気がついて、道を曲がります。黒猫に気をつけないといけないんだと思い込んでいたんですな。はっきり覚えてもしなかつたくせに、占いの結果を律儀に信じたんですな。けったいなもんです。ところが、彼が通らなかつた道の方から悲鳴が聞こえてくる。なんでも、コンビニの前で引ったくり事件が発生したそうです。で、彼は思うんですよ、もし、あの占いを信じないで、そのまま歩いていたら自分が被害に遭っていたかもしれないってね。そうなるともうダメです。

黒猫が怖くてたまらない。妻から聞いていたスーパーのおもちゃ売り場に行ったところ、黒猫のぬいぐるみが積み上げてあるのを見て、あわてて引き返します。で、店を出て、わざわざバスに乗って、別の店に急いだ。

でもね、ばかげているようですが、ここでも、黒猫を避けたことが結果的には正解だったんですよ。実はね、その店では彼の子供が欲しがっていたおもちゃは売り切れてたんです。しかも、それが置いてあったところでは、別のキャラクターの人形を売っていた。そっちの方は彼の子供はあまり好きでない、いや、むしろ嫌いだったんです。でも、売り場でサンタの赤い帽子をかぶって、おもちゃをアピールしていた若い女性は、パパの大好きなタイプでしたんでね、もしそのまま予定通りの売り場に行ったら、子供の喜ぶ顔は見られなかつた可能性が高いというわけなんです。

ま、そんなわけで、バスに乗って行ったおもちゃ屋さんで男はクリスマスプレゼントを買った。値引きがないので、あとで妻からは文句を言われたけど、実際のところ、ないよりマシです。もつとも、買った本人はそのことを未だに知りませんけどね。

ふふふ、それに、おもちゃを買った帰り道でもこんなことがあったんですよ。いや、かなり過敏になっていたこの男、帰りのバスに乗ろうとしたところで、黒猫の絵を描いたトラックが前を走っているのを見て、電車に乗ることにして、引き返したんですよ。これまた幸運でした。もし彼がそのバスに乗ってたら、その後におきた事故に巻き込まれて、クリスマスプレゼントどころか、自分の命まで落っこす羽目になっていたんですからね。

ま、とにもかくにも結果的に彼は無事に、子供へのクリスマスプレゼントを買って帰ることができた。これも占いの結果を信じて、そのとおりに行動したからなんですけど...彼が信じてたのは、実際に出た結果とまるで正反対だったわけですよ。これじゃ占いが当たったとは言えない。だって、もし正しい占いの結果を信じていたら、彼は黒猫のいる方へ、いる方へと進んで不運に

見舞われていたはずじゃないですか。間違いでも何でも人が強く信じたことは、、、そのようになるのかもしれませんが。

いや、そもそも、子供がサンタクロースを信じる純粋な心が、この男の身に小さな奇跡を引き起こし、彼にとっての、本当のサンタクロースを呼び寄せたのかも知れません.....なんて考えはさすがにおセンチに過ぎますかね。へっへっへ、何はともあれ、皆さん、よいクリスマスを。あたしゃ、この辺で消えさせていただきますよ。ふふふふふ...

鈴の音。続いて、車輪のきしむ音、トナカイと思われる足音が夜空を遠ざかっていった――。

## 青くない鳥

少女はすっきりと痩せた白い腕をのぼして、鳥籠を手にとった。どこか線のか細い、薄い色の似合う少女。鳥籠には、一羽のカナリアがいる。鳥籠は窓際にあるので、自然と窓の外に視線が向かう。向かった先の、窓の外にはちらちらと雪が舞い始めている。外の空気は触れれば斬れるように冷たいのだろう。でも、この部屋の中は暖かい。暖房が効いているから。雪に覆われていく世界は、終わっていく世界だ。比喩ではなく。世界を少しずつ終わらせながら、雪はちらちらと、後から後から舞い降りる。

きれいだな、と想うけれど、積もった雪が溶け始めたときのこと、容易に想像できる。泥濘に埋もれる地面とか、電線やら木の枝からぽつぽつと零れ落ちる水とか、靴から浸みってくる、氷のように冷たい水とか――。天から降りてきた水が地を浸食していく様子を、はっきりとイメージできた。水の内に潜む火。暗く燃える、死の天使。はっきり、イメージできた。燃えていない火が、水の姿になって降りてくる。

少女はことり、と小さな咳をする。カナリアの鮮やかな黄色を、きれいだな、と想う。少女の身の回りで、きれいなのはこのカナリアぐらいだ。

少女は、カナリアの餌箱を掃除して、水を入れ替える。鳥籠の底に敷いた紙も、鳥の落とした排泄物で汚れているので取り替える。不衛生だが、汚いとは思わない。カナリアは生きている。生きているものは汚くない。

光の当たり具合によっては、燃え立つようにも見える黄金色の鳥が、新しい餌をついばんでいる。その姿を見ながら、少女は或る種の愛おしさを感じる。子どもの頃、青い鳥という童話を読んだのを思い出す。幼い兄と妹が、幸せをもたらすという青い鳥を探して、夢の中の世界を旅して回る。しかし、見つけた鳥はすぐに死んでしまったり、色が変わったりしてしまい、ほんとうの青い鳥を見つけることができない。目が醒めてみると、元から飼っていた、鳥籠の中の鳥が青く見える。そんな話だったように思う。いや、最後に見つけた青い鳥も、何かの拍子に鳥籠か

ら逃げてしまったのだったか...、細かいところまではよく憶えていないが、大筋では間違っていない...と思う。

青い鳥が、どこかにいるのかは分からない。ひょっとしたら、そんなものは存在しないのかもしれない。幸福とは、そもそも思い込みの中にしか存在しないのかもしれない。

ここにいるのは、黄色い鳥だ。だけど、生きています。きれいな色をして、生きています。ここに存在して、水を飲み、餌を食べ、便を出す。そして、やがては死んでいく、確かな現実だ。

少女はまた少し、咳をする。風邪気味なのだろうと想う。でも...、やはり、もっと違う、何か重い病気の兆候なのかもしれない。

少女の父は、ある日突然、いなくなった。死んだのだろうと想う。はっきりとは分からない。死んだのだろうと推測はできるけど、死んだのだとはっきりしたわけではない。そんな人間が多すぎる。そこには、人間の尊厳とか、そんなものは一切ない。少女は、悲しいな、とは想う。だけど、それ以上の感情は起きてこない。所詮、人とは或る日生まれ落ちて、やがて死に至る、一本の管に過ぎない。口腔から肛門に至る、細長く薄暗い空白。それがヒトの本質なのだろう。

少女の母は、酒浸りの日々を過ごしている。時々、怒鳴ったり、何かを殴ったり、蹴ったりする。彼女のことを、少女は、弱いのだと理解している。悪いのでも、汚いのでもない。弱い、のだ。

時には、そんな母のことを、或る意味気楽だな、と感じたりもする。得な性格...なのかもしれない。あらゆる問題は外部にあり、自分は被害者だという、確固たる信念を崩さないで生きているのは...尊敬に値することなのかもしれない。それでも、その感じ方は間違っているのだと、どこかで少女は知っている。

自分は...自分のことは、一番よく分からない謎かもしれない。少女は感じる。何年か先に、私は癌になるのかな？或いはもっと先の未来かもしれないけれど。

特に何になりたいとか、どう生きたいとか想わない。何者にもなりたくない。強いて言うならば、折り目正しい役立たず。そう、それが今の世の中では、一番、害も罪もない生き方なのかもしれない。

少女はまた、カナリアを眺める。カナリアは、なぜ生まれたのか、なぜ生きるのか、そんなことは考えない。ただ、食べて、飲んで、歌い、排泄し、生殖し、やがては死んでいく。何も生み出さず、何も失わず、ただ、生きて、ただ、死ぬ。この小汚い部屋の中の、ちょっとはきれいな現実だ。

私はこのカナリアと生きよう。この鳥に、餌をやり、糞尿を掃除し、生かされるだけは生かしてやろう。生きていくかぎりは、無意味を産み出し続けよう。幸福だとかどうだとか、そんなことは無縁の人生を生きよう。それが...、きれいな現実だ。ただ、きれいなだけの現実だ。

少女は、いくつか残っている手首の疵痕をちらりと見、それから窓の外の雪を見た。あの雪には、どれくらいの放射性物質が含まれているのかしら、と想った。

## あとがき

世間一般に向けて公開する僕の創作集は、これで二冊目になります。一冊目は、かなり童話を

意識していました。でも、童話ならではの決まり事などがよく分からず、用字の問題もクリアできていませんでしたので、童話とは銘打たずに公開しました。ちょっと逃げの姿勢が入っています（汗）。

今回も、大人向きでもなく、あまり胸を張って子ども向けと言えるような内容にもなっていないくて、中途半端な感じは否めませんが、それでも、何か少しでも、心が動いたと感じてくださる方がいてくだされば幸いです。

どうか、今後とも、末永くおつきあいくださいませ。

あすか こうじ